

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2006～2009

課題番号：18202021

研究課題名(和文) 近代日本の戦没者慰霊に関する総合的研究

研究課題名(英文) The general study about the memorial services for the war victims in Modern Japan

研究代表者

檜山 幸夫 (HIYAMA YUKIO)

中京大学・法学部・教授

研究者番号：40148242

研究成果の概要(和文)：近代国民国家における戦没者慰霊について、国家と国民、地方と市民、信仰と宗教を軸に、国内及び各国における慰霊と顕彰を戦争記念碑と戦没者墓碑を悉皆調査してその実態を把握した。その結果、日本においては個人及び地域の主体性が基本になっておりしたがって死者の宗教が尊重されていること、諸外国では(a)戦勝国の米英仏国などは国家の下に個人の宗教によって顕彰・慰霊され、(b)中国・ベトナム・トルコなどの新興国家は国家主義と国民統合の政治的象徴として顕彰・慰霊され、(c)敗戦国のドイツは個人の尊重と平和主義により慰霊がなされ、その他の国ではこれらのベクトルの中でそれぞれぞれの位置を占めていることが判った。それらは、敗戦による国家の崩壊と戦争の悲惨との度合いと現在の国家体制を要因として決定される。それを決定付ける要因は、その政治体制の力学、歴史と文化の作用、社会の結束力の関係性にあることを解明するに至った。したがって、国家慰霊祭祀の問題はこの原則を踏まえて考えるべきであろう。

研究成果の概要(英文)：We did research on the national cemetery for the war dead, family graves which included the war dead, and the memorial war dead in Europe, Asian area and Japan. We specialized the time at the modern nation state. In this study, we focused on the reference between the nation and the people, between the certain area and its citizens, and their religions. Below are the conclusions of this study.

Japan

In Japan, the basic pattern of the graves for the war dead were erected by their own families and respected their own religions. People erected the graves for the war dead and sometimes the memorials war dead, independently.

Foreign Countries

(a)In U.S.A, U.K. and France, these nations are the winners of the First and the Second World War, the cemetery for the war dead is erected by the nation, and the war dead soldiers are recognized by the nation. Also, they are remembered by the memorial services. The soldier's individual religion is respected by the nation.

(b)In China, Vietnam and Turkey, these nations are emergent countries, the cemetery for the war dead is erected by the nation. Especially, they are recognized as the political symbols of the nationalism and the national unification.

(c)Germany, which is the loser of the First and the Second World War, the cemetery for the war dead is erected by the nation, and the war dead soldiers are recognized by the nation. But the philosophy of the recognition is based on the individual's respect and the pacifism.

Other nations

In our research, we could find these three types on the recognition of the war dead. In other countries, the recognition of the war dead shows us the mixed types of these three types.

These types about the recognition of the war dead depends on the several factors. The first factor depends on whether the nation were a winner or not. The second factor depends on the level of the

destruction by the attack. And there are another factors in the back. These are the political dynamics, the history and the culture of the nation, and the solidarity of the society.

So, when we do work on this problem, we have to depend on and consider well these plural principles.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	11,300,000	3,390,000	14,690,000
2007年度	10,700,000	3,210,000	13,910,000
2008年度	10,200,000	3,060,000	13,260,000
2009年度	6,000,000	1,800,000	7,800,000
総計	38,200,000	11,460,000	49,660,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：戦歿者慰霊・戦歿者墓碑・戦争記念碑

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した当初は、戦争記念碑と戦没者慰霊に関する研究が盛んに行われるようになっていた。だが、これらの研究の多くが靖国問題に拘りすぎたものや、特定の地域に限ったものや一定の時期に絞ったもの、様々な領域に特化させたものが多く見られ、研究そのものは深化し発展させては来ていたが、「近代の日本人と日本社会における戦没者慰霊とは何か」といった本研究の課題に接近するものは少なかった。このようななかで、本研究は昭和60年度の科研奨励研究A以来継続していった国内及び台湾・中国での実地調査研究と平成14年度からの基盤研究Aによる組織的で総合的研究によって挙げた成果を基とし、さらにそこで培ってきた研究方法論を土台として、より緻密な調査と分析の仕方をもって、さらに広い視野と世界的視点で課題を捉える方法論と準備を整えていた。

2. 研究の目的

日本近代史研究において重要な研究課題でもありながら未だに解明されていないのが「近代日本における戦争と国民」における「近代の日本人と日本社会における戦没者慰霊とは何か」という課題である。これは、現代の政治的問題ともなっている靖国論争の根幹にかかわっていることから、現代的課題でもある。かかる点を踏まえて、本研究では「近代日本における戦争と国民」を基本的な視座に据え、日本における国民の軍事的統合と戦争協力体制・戦争支援態勢、地域社会における戦勝顕彰と戦没者慰霊、戦後の戦争記録・戦没者慰霊と日本社会という課題を、

日本と日本人という全域的視点と国際的視点から、これら象徴している表象構造物である戦争記念碑と戦没者墓碑石という「もの史料」を主要資料としてその実態を詳細に明らかにしていくとともに、「近代国民国家における戦争と国民」を踏まえて「近代日本における日本人と日本社会における戦没者慰霊における日本の特徴とは何か」を明らかにしていくことを研究の目的としている。

3. 研究の方法

近代国民国家における国民統合と国民の戦争協力支援体制の方法の一つが、国民意識を形成向上させていくための表象構造物である戦争記念碑と戦没者墓碑石（墓地）やそれに類する表象物といった「もの史料」であることから、この「もの史料」を戦前期と戦後期を包括しながら地域という単位を全体的に、国家や社会という単位で総体的に、国際比較ということから同じ敗戦国であるドイツをはじめ諸外国を事例的に捉えて、それらの実態を把握するために実地に悉皆調査し、それらの実相を詳に記録し、かかる詳細な情報を基に科学的に分析していった。調査資料情報は、簡易測量記録・筆写模写記録・写真記録・音声画像記録として収集し電子情報化して記録化した。

4. 研究成果

本研究では、研究目的を達成するために、(1)戦没者慰霊を象徴する造形物、(2)戦没者慰霊にかかわる関係史資料、(3)戦没者慰霊を担っている組織に絞って、その実態を調査した。(1)については、主に①軍人墓地における戦争

記念碑・慰霊碑・忠魂碑等や墓碑石と関係物を、②戦没者墓地における祈念碑・慰霊碑・忠魂碑や墓碑石を、③一般人における戦没者墓碑石等を、④戦争記念碑（戦役記念碑や戦勝記念碑等）を、⑤戦争記念物、⑥戦争関係構造物や構築物と関係物、⑦一般構築物における戦没者慰霊物（銘碑板等を含む）などを実地に調査し、資料を収集した。調査地については、国内では福島県・石川県・広島県・徳島県・沖縄県をはじめとする1都2府12県で、海外ではドイツ・フランス・イタリア・オランダ・マルタ・トルコ・チェンジア・ベトナムをはじめ19ヶ国で現地調査を行い、そこにおける戦争記念碑と戦没者慰霊のかたちに関する資料を収集し、それをもとに分析を行った。(2)の関係史資料については、電子化写真撮影記録・電子式複写記録により収集した。(3)戦没者慰霊を担っている組織、つまり墓地の建設・管理や墓碑石の建立、慰霊祭・平和祈願式などの執行を含めてそれを管轄している組織・機関・団体などに対する聞き取り調査を行ったり関係史資料の収集を行った。日本では、現在でも慰霊祭などを実施している自治体や記念碑や墓碑・墓地を管理したりしている遺族会を、海外では英国・米国の団体と、我が国と同じ敗戦国であるドイツの団体について調査した。特に、ドイツについてはドイツ人戦没者墓地の管理とドイツにおける平和教育・慰霊式典などを行っているドイツ戦没者墓地慰霊協会での聞き取り調査を行うとともに同協会の全面的な協力を得て、各国に設置されているドイツ人戦没者墓地の調査を行った。調査地としては、国内では社会的・文化的・宗教的側面と現代性・地域性、さらに都市部と農村部に島嶼とを基準に全国的視点から、国際的には東アジア近隣諸国での仏教的世界と非宗教的世界・ヨーロッパキリスト教世界・アラブイスラム教世界から抽出して行った。その結果、次のような成果を得ることができた。

(1)日本人社会では、都市化による共同体の崩壊と人口の流動化が比較的穏やかな地域では、戦没者の尊厳が守られ地域の伝統と文化と共同体的結合により、伝統的戦没者慰霊のかたち（宗教宗派の共存と価値観の独自性）が、戦後においても残されていること。

(2)戦争記念碑は近代国家の象徴的構築物であることから、国家などによって建立されたものが調査した殆どの国に認められた。また、戦争に対する国民の記憶を残し共有化し教訓化するための施設も、多くの国で見ることができる。その意味では、明治以来国家が戦争記念碑を建立したり戦没者墓地（軍用墓地ではない軍人墓地を含む）を造営してこなかった日本の事例が例外的なものであった。

(3)戦没者の慰霊について、多くの国では郷土と国家の英霊として位置付けられている

ため、戦没者慰霊は国家の論理による国民統合の原則が貫かれている。したがって、死者への慰霊に対しては宗教へのこだわりは従いとなり、死者（遺族）の信仰が尊重される。日本でも、地方では各国と同じで、日本人社会や日本の伝統という視点からみると国際的共通性を持っていた。

(4)戦争と信仰では、兵士と郷土社会との関係から殆どの地方や諸外国において、地域の伝統と文化が基礎になっていた。従って、従軍凱旋者も戦死者も郷土の宗教施設に祀られる事例が圧倒的に多い。

(5)慰霊の形式や方法と造形物における伝統性・国際性との関係は、世俗性との関係が明らかになった。特に表象では、経済の発展と密接にかかわり、且つ物流の密度と情報の交換頻度の高さによる異文化・異民族との接触が深化によって、相互に影響し合っ国民的同一性と国際的類似性とは強められるという傾向が顕著になっている。そこでは、キリスト教やイスラム教といった宗教的個性すら弱められていた。

(6)戦争記念碑には、1945年を境界として、(a)歴史化した記念碑と(b)現用の記念碑とがあり、①伝統型記念碑と②戦後型の記念碑とがあり、それぞれの相互連関的関係の組み合わせによって、現在の状態が規定され存立している。一般論的には、(b)で②は戦勝国に、(a)と①との共存には敗戦国に多く見られるが、さらにそこでは国家主義や愛国主義が顕著に表象されている②を全否定的に捉えるかたちのものが多い。勿論、戦勝国といってもさまざまではあるが、中国やベトナムといった社会主義国では国家統合・国民統合の象徴的な役割を強く持たせていることから最も②の基本思想に忠実なものになっており、米もその傾向は強い。②の反対極にあたる①を象徴するのは、警告記念碑とも呼ばれているもので、多くは敗戦国の日本やドイツにみられる。内容的には、戦争の真実と実態を伝えるなかで犠牲者を慰霊しながら再び過ちを起こさないという決意を現代に語り掛け及び後世に伝えるという(b)の役割を果たしている。このため、戦争記念碑は戦後政治と戦後社会と密接なかかわりをもっており、それ故、戦争記念碑の研究では1945年を境とする断絶とそれを越える連続性（変質を含む）との相関関係を包含する視点から捉えて行かなければならないことが判ってきた。

(7)敗戦国としての戦後国家での戦争記念碑と戦没者慰霊のかたちに対する違い（日独の相違）は、戦後の国家の姿に密接に関係していた。つまり、総体的一般論的に見ると、過去への総括の仕方から相違が生まれるというのではなく、戦後政治と社会におけるかかわりにかかわったものである。それが、戦

没者慰霊に対する日本国内での論争の原点がある。このことは、現代大きな問題となっている靖国問題が論争を重ねる毎に益々偏狭で異様なものになっていく原因にもなっている。このため、これへの解決方法は、戦没者慰霊の原点に立ち戻り、且つ、各国における戦争記念碑（戦争の記録化）と戦没者慰霊のあり方を具に見るといふ、国際比較と基礎研究とを組織的、体系的、総合的に行わなければならないことを示していよう。

(8)同じ敗戦国でありながら日独間に大きな相違が見られる原因が、前項によるものであることから、その違いを具体的に洗い出していく必要がある。このため、本研究ではドイツ国内及び各国に設置されたドイツ人戦没者墓地を詳細に調査し、戦没者に対する祀り方（墓地の構造から各墓碑石に刻まれている情報まで）を記録した。また、日本においては各市町村の字単位といった地域共同体に建立されている戦争記念碑と戦没者墓碑石（軍人墓地を含む）を悉皆調査しそこの情報を詳細に記録し、ドイツとの相違を明らかにした。

(9)これらの分析から、靖国神社という特定の宗教的施設における合祀問題が、ドイツをはじめ多くに国における戦没者慰霊の考え方や慰霊のかたちと隔絶した特異なものであること、反対に、市町村など地域共同体に建立されているものは却って国際的に標準的なものであることが判ってきた。

(10)日本における戦没者慰霊にかかわる資料は、自治体として慰霊祭などを行っている地域や主催している遺族会などの各種団体においては比較的保存されているものの、それでもかなり濃淡があり、実際的には戦前戦後を通じて日本においては文書史料の多くは保存されていないことを実態的に再確認した。したがって、日本における戦争記念碑と戦没者慰霊を「日本」「日本的」「日本人社会」といったキーワードで研究する場合には、実際の記念碑と墓碑石を悉皆調査するなかで詳細な調査記録を集めて分析していくしか方法がないことが判った。この問題は、戦争記念碑と戦没者慰霊という分野に限ったことではなく、日本人と歴史史料という全く別の問題として検討していかなければならない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計12件)

①檜山幸夫、「帝国日本統治下台湾における台湾人戦没者の靖国神社合祀問題について」、台湾学研究論文集、14頁～39頁、2009年

②前川佳遠理、「日本占領下東南アジア研究史」(『東南アジア史研究の展開』東南アジア学会監修、山川出版社、2009年)

③サーラ・スヴェン、「Personenkult im Modernen Japan: Denkmäler für die Gründer des japanischen Kolonialreiches in Taiwan, Korea und er Mandschurei」(近現代日本における個人崇拜。台湾、韓国、満州における日本植民地政策の担い手たちを記憶する記念碑・銅像)独文、Günter Distelrath (ed.): Referate des 13. Deutschsprachigen Japanologentages, Bd. II. Berlin: EB-Verlag, 296-323頁、2009年

④サーラ・スヴェン、「Men in Metal: Representations of the Nation in Public Space in Meiji Japan, 1868-1912」(「鉄人」。銅像文化にみる明治日本における公の場のネーション表象)英文 “Comparativ. Zeitschrift für Globalgeschichte und vergleichende Gesellschaftsforschung” 20, 27-44頁、2009年

⑤檜山幸夫、「日本近代史資料としての戦争記念碑—忠魂碑の史料論的考察—」、史潮、査読有、新63号、2008年、4頁～22頁

⑥サーラ・スヴェン、「日本とドイツにおける歴史認識。その概念と実態」和文『国立歴史民俗博物館研究報告』147, 561-78頁、2008年

⑦サーラ・スヴェン、「Recent Developments in the Representation of National Memory and Local Identities: The Politics of Memory in Tsushima, Matsuyama, and Maizuru」(対馬、松山、舞鶴における歴史ポリティクス。ナショナル・メモリーとローカル・アイデンティティの表象)英文 Japanstudien. Jahrbuch des Deutschen Instituts für Japanstudien 20, 247-77頁、2008年

⑧前川佳遠理、「Forgotten Captives in Japanese-Occupied Asia, Karl Hack and Kevin Blackburn (eds.)Chapter 11 “White Skin, Yellow Commander” Routledge、2007年

⑨前川佳遠理、「オーラル・ヒストリーの実践—インドネシア兵捕をめぐると歴史体験」813, 8頁～16頁、2006年

⑩前川佳遠理、「The Pacific War in Papua New Guinea: Memories and Realities, Yukio Toyoda and Hank Nelson (eds.), Part. 3”

Forgotten soldiers in the Japanese Army: Asian POWs in Papua New Guinea” Rikkyo University Centre for Asian Area Studies、2006年

⑩前川佳遠理、Asian Labor in the Wartime Japanese Empire, Paul H. Kratoska (ed.), Chapter 9, “The Heiho during the Japanese Occupation of Indonesia” Singapore University Press、2006年

⑪サーラ・スヴェン、「植民地支配と人間崇拜—日本とドイツの植民地における銅像」和文『後藤新平の会 会報』2号、51-59頁、2006年

〔学会発表〕(計4件)

①東山京子、「日本における戦死者慰霊について—国際的比較研究の視点から—」国際学術研究会・戦略互惠框架下中日関係の現実と未来、中華日本学会・遼寧大学日本研究所、2009年9月19日

②東山京子、「天皇制国家と台湾人の国民統合」台湾植民地史学術研究会、中国社会科学院台湾史研究中心、2009年8月22日

③檜山幸夫、「日本帝国台湾統治構造論」台湾植民地史学術研究会、中国社会科学院台湾史研究中心、2009年8月21日

④檜山幸夫、「靖国神社祭祀問題にみる「大日本帝国」の台湾統治の支配原理」台湾学研究会国際学術研究会：殖民と近代化、国立中図書館台湾分館、2008年11月7日

〔図書〕(計3件)

①檜山幸夫、大友昌子、松田京子、本康宏史、東山京子、田村一郎、サーラ・スヴェン、『世界の戦争記録と戦死者慰霊(科学研究助成報告書I)』、近代日本の戦没者慰霊に関する総合的研究(A)、2009年、214頁

②サーラ・スヴェン、The Power of Memory in Modern Japan (近現代日本における歴史記憶の諸相)英文、London: Global Oriental、381頁、2008年

③サーラ・スヴェン、「Pan-Asianism in Modern Japanese History. Colonialism, regionalism and borders (近現代日本史におけるアジア主義—植民地主義、地域主義、境界)英文 London and New York: Routledge 288頁、2007年

〔その他〕

ホームページ等

<http://openweb.chukyo-u.ac.jp/~yhiyama/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

檜山 幸夫 (HIYAMA YUKIO)
中京大学・法学部・教授
研究者番号：40148242

(2) 研究分担者

大友 昌子 (OTOMO MASAKO)
中京大学・現代社会学部・教授
研究者番号：30060700

松金 公正 (MATSUKANE KIMIMASA)
宇都宮大学・国際学部・准教授
研究者番号：50334074

松田 京子 (MATSUDA KYOKO)
南山大学・人文学部・准教授
研究者番号：20283707

藤波 潔 (FUJINAMI KIYOSHI)
沖縄国際大学・総合文化学部・准教授
研究者番号：20328652

加藤 聖文 (KATO KIYOFUMI)
国文学研究資料館・アーカイブズ系・助教
研究者番号：70353414

前川 佳遠理 (MAEKAWA KAORI)
上智大学・アジア文化研究所・共同所員
研究者番号：30413917

(3) 連携研究者

サーラ・スヴェン (SAALER SVEN)
上智大学・国際教養学部・准教授
研究者番号：70401205

(4) 研究協力者

田村 一郎 (TAMURA ICHIRO)
元鳴門市ドイツ館・館長
研究者番号：なし

本康 宏史 (MOTOYASU HIROSHI)
石川県立歴史博物館・学芸課長
研究者番号：なし

東山 京子 (HIGASHIYAMA KYOKO)
中京大学・社会科学研究所・特任研究員
研究者番号：80570077